

## グローバル化と日本社会

副会長 佐藤健一



グローバル化が叫ばれてから久しい。グローバル化が良いか悪いかの議論は別として現実問題としてそれに対応しなければならない状況においても、日本では一向に論理的な思考、権限の委譲、リスクを取る迅速な判断が行なわれないのはなぜなのかと考えてしまう。先日たまたま、約30年ほど前、1985年に当時在職していたNTTから交換研究員として派遣されていたBT (British Telecom) から帰国した際に、社内用の新聞に記したBT滞在記を見つけた。以下、原文のまま、その書き出し部分を引用させて頂く。

「私が滞在したマートレシャム研究所は、BTの主要研究所で、約1,500名の研究者と800名の研究補助者が研究開発を行っている。私はBTが開発を行っているAdvanced CATVシステム(スイッチドスター光CATVシステム)のプロジェクトに加わり、研究を行った。このプロジェクトでは、CATVという極めてコストセンシティブな領域での実用化システムの開発を行っており(9月にロンドンでサービスを開始した。)研究室内でもしばしば「一はいくらか?、メーカーはどこか?」といった話が交わされる。

多民族で構成され、個人のアイデンティティーを大切にするとともに、各人がindependentである社会において、その社会システムは外国人の私にとっても、比較的分かり易いものとなる。例えば、BT内では、組織内での権限、責任分担が明確化され、仕事が極めて効率的に進められる。日常しばしば、“He is responsible for一.”といった様な表現を耳にする。また、BT内での組織間の移動、昇進の制度に関しては、毎週水曜日に発行されるGAZETTEという新聞にvacancyの公募が掲載される。そこで望むポストがあれば、本人が(勿論一定の条件を満たす者)ポスのサインを貰い、応募する事になる。応募者の選考は、例えばグループのヘッド(HG)であれば、本人に対するインタビュー及びqualificationの審査結果を基に行われ、最終判断は、研究部のヘッドが行う。HGへの応募にあたっては、過去の自分のBTへの貢献に関し、1,000語以内のpaper workを提出し、インタビューでは、OHPを使い、HGとしての研究方針を述べ、インタビュアーの質問に答えたり討論を行う事になる。インタビュアーの質問には例えば、「来年\*\*ポンドの予算を与えられたら、どういう事に使うか?」などというものも有り、HGに応募した友人のDavidは、「自分の首をつる縄を買う」と答えたそうである。さて、Davidもめでたく昇進が決まったが、決まった時にはDavidとHGのポストを争った他のグループの人がDavidを祝福に来て、“Well done!”と言って握手をしていた。その他、各ランクの職員の給与表が毎年職員に公開されるなど、契約に基づく社会のクリアなシステムは印象的であり、社会全般に渡り、表現されたものを重要視する分かり易いシステムとなっている。」

30年ほど前に若い一技術者が感じていた日本の社会システムの複雑性、非合理性/非論理性の改善は遅々として進まない。このことは2年前の東日本大震災における原発事故に対する危機対応能力の欠如にも如実に表れている。つい先日アメリカ出張の際、機内で読むために空港で購入したKevin Maher著の「決断できない日本」(実は2年前に発刊されて話題になったとき、題名だけ見て、「分かりきったことを書いているだけだろう」と思い、当時は購入しなかった)は、ディベートの教材としても価値が高い。「事実ではない報道」により、「最も愛した日本で一番嫌われる男になってしまった」かつての外交官の著作は、同書で扱う政治の課題を超えて、グローバル化において日本に必要とされる事柄を説得力を持って語っている。まだ読まれていない方には、強くお勧めします。